

スポーツ系部活動経験がもたらすモラル形成に関する研究

和氣 生也 (生涯スポーツコース 地域スポーツコース)

指導教員 新井 博

キーワード：スポーツ経験、モラル、マナー、社会

1. 緒言

近年、「ゆとり世代」という言葉や「最近の若者は・・・」などと言われ、筆者たちが生まれた年代が、社会に出ていくことに対して問題視されている報道をよく目にする。その中で、筆者たちが習得してきた事柄を社会に適応させるためには、何をアピールポイントにすればよいのか、疑問に感じる。

そこで本研究では、筆者たちスポーツ大生が、これまでのスポーツ経験で習得したモラルを、どの様に社会人として活かしていくことができるのかを明確にすることを目的とする。

更に、今後のスポーツの重要性や課題を提言すべく、スポーツ系部活動経験者とそれ以外の者とで比較し研究を行う。

2. 研究方法

本研究の調査対象者は、本学のスポーツ系部活動を経験してきた学生(129名)と、他大学(R大学など4校)の文化系の部活動のみ経験してきた学生(51名)に調査を行う。共に18歳から22歳の学生を対象にする。

調査方法は、「遊び」・「アルバイト」・「交友関係」・「学校生活」・「家庭内」の5つの学生特有の観点に関するアンケート調査を行う。その結果をSPSSでデータ解析し、意識の差を分析する。

3. 結果と考察

1) 『遊び』についての比較

スポーツ経験者にとって、「集団行動」、「食事」、「リーダーシップ」、「時間」に関してのモラルは、社会でアピールしていけるが、「ギャンブル」などで、下手なお金の使い方をする

ことは、時に社会的信用を失うことに繋がるため、改善していかななくてはいけない課題である。

2) 『学校生活』についての比較

「時間」や「マナー」、「挨拶」でのモラルでは、スポーツ経験者の方が、意識を高く過ごしていることが分かった。しかし、「集中力」に関しては、文化系の者の方が、意識を高く持っている結果になった。スポーツ系の者は、興味のあることには、集中するが、興味のない事(特に勉強)には、集中力に欠くと分析した。これは他者に迷惑をかける原因になる可能性がある。そのため、スポーツ経験者にとって、興味のないことでも、集中していくことが、今後の課題となった。

4. まとめ

スポーツ系の者にとって、「集団行動」や「リーダーシップ」、「時間」、「挨拶」などに関してのモラルは、社会でアピールしていけるポイントである。これらのことを継続して、行っていくことが社会では必要である。

しかし、「ギャンブル」や「集中力」などでは、今後改善すべき課題が存在した。金銭に関しての考えや使い方など、計画的になることが社会では必要である。そして、集中力に関しても、時と場合をしっかりと把握し、適した対応をしていくことが、重要である。

5. 参考文献

ローレンス・コールバーグ(1992年) 道徳性の発達段階: コールバーグ理論をめぐる論争への回答.新曜社.